

《研究ノート》

清末中国における「読者」の位置

——呉趼人の対読者意識をめぐって——

佐藤 賢

「革命史観」に依拠した文学史記述の相対化を試みる
 「重写文学史(文学史の書きかえ)」は、近代文学の起点とされる「五四文学革命」に先行する「清末(晩清)」と呼ばれる時期の文学活動を文学史の中でどのように位置づけるのかといった問いを促すものであるが、そうした試みには「文学の自律性」をより重視する傾向がみられる。⁽¹⁾これも政治に従属するような文学研究からの脱却を試みる動きであると言えるだろうが、「文学の自律性」を重視する観点から、「小説」により「国民」を創造しようとした梁啓超(一八七三—一九二九)の「小説界革命」の提唱を、功

利的な文学観であると否定し去り、当時そうした文学観が打ち出されなくてはならなかったという問題を切り捨ててしまうこともまたできないはずである。というのも、「文学の自律性」を自明とする文学史観は、西欧における「市民社会」の成立を背景に起ってきた近代の文学制度に基づいて構想されているのに対して、そうではない非西欧地域において文学を構想することは、「文学の自律性」で一般化することのできない問題を内包せずにはいられなかった⁽²⁾のであり、このことを松永正義は「中国そして日本において文学に向おうとするものは、作者の確立と同時に、読者を形成するという、創造者と啓蒙者の二重の役割を引き受けざるをえなかった」と端的に表現している。⁽²⁾近代における「読者」とは、「近代的な自我」に基づく作者の確立に対応するような自覚的な読者という側面とともに、近代社会の成立にもなって要請される階層化されることのない「国民」的な読者という側面も併せ持つものであり、梁啓超の「訳印政治小説序」(一八九八)にみられる、兵・商・農・工・車夫馬卒・婦女童蒙から愛国の士にいたるまで、すべての国民が共有する「国民之魂」としての小説という構想における読者の像とは、後者に重点を置いたよう

な国民的な広がりを持ったそれまでにはない新しい近代的な読者像であったと言える。さらに、近代文学の形成期と列強の植民地化に対抗する国民国家形成の時期が重なっていた中国においては、抵抗運動の主体として読者を動員することが文学の場で強く意識されたが、その際、問題化してきたのが、識字能力の不高くない、自覚的な読者としての要件を満たすことのできない「未成熟な読者」の存在であった。清末とは中国においてはじめて「未成熟な読者」の問題が前景化した時代であったと言えるが、この読者の問題は、清末に限らずそれ以後もたえず作者にとって表現活動に向かう際に内包せざるをえない存在として浮上してきたと言える。

本稿では、「国民」としての読者の形成という近代的な要請下において読者の問題を強く意識せざるをえなかった清末の表現者の一人として呉趼人（一八六六—一九一〇）を取りあげ、呉における対読者意識の変容の問題を当時の歴史的・社会的状況の中で考察したい。呉は清末における代表的な小説家に数えられ、梁啓超が主宰した『新小説』にも『痛史』（一九〇三）、『二十年目睹之怪現狀』（一九〇三）などを発表しているが、梁啓超が早期に小説の執

筆を放棄したのに対し、『情變』（一九一〇）の発表を最後に没するまで、清末小説として取りあげられる時代のほぼ全期間を物語作者として通過している。この点でも清末を代表する小説家であると言えるが、その一方で、「自我意識」の欠如という清末小説家を持っていた問題を象徴的に体現しているとも評価されている。⁽³⁾確かに、「文学の自律性」を前提として考察するならば、清末小説とは総じて西欧文学の「歪み」とみなされるのかもしれない。⁽⁴⁾しかし、むしろそうした「歪み」も含めて中国文学の近代性は考察されるべきなのではないだろうか。⁽⁵⁾

以上のような問題意識から、本稿は先行研究をふまえながらそれらに若干の整理を加えることにより、「読者」という視角から清末の文学状況を素描しようとする覚え書である。また、読者の問題を全面的に説明するためには実体としての読者について社会的な研究が不可欠であることは言うまでもなく、さらに本稿においては呉趼人自身についてもごく限られた一側面に触れているにすぎないことを断っておきたい。⁽⁷⁾

二

近年、中国文学研究において、小説表現の形式の変遷から文学史の書きかえが試みられているが、これもそれまでの政治イデオロギーを作品評価の基準とするような内容(政治イデオロギー)に偏重した研究傾向からの脱却をはかる試みと位置づけることができる。その嚆矢として物語論的な手法を導入した陳平原の研究があげられ、量、質ともに陳の研究をこえるものはその後あらわれていないが、物語論の導入により、清末小説を、伝統白話小説や五四小説と形式の面から同じ地平で論じる視角が得られるようになったと言える。⁽¹⁰⁾

伝統白話小説においては、「講釈師(説書人)」としての語り手と「看官」としての聴き手による「語る―聴く」という関係を持つ「語りの場」(千野拓政)⁽¹¹⁾がテクストの内部にみられ、この「語りの場」を前提として全知の語り手である「講釈師」によって物語が語られる。また頻繁に語り手は講談における講釈師のように饒舌を披露し、物語の進行に介入するが、このように伝統白話小説に「語りの場」がみられるのは、白話小説の成立の前史に語り物文芸

の展開が存在していたことがあげられる。⁽¹²⁾ただ、注意しなければならぬことは、「語りの場」とは語り物文芸を直接的に反映したのではなく、長い期間をかけて制度化されたテクストの形式としての側面が強いことである。⁽¹³⁾

清末小説にも全知の語り手が採用され、「語りの場」がみられるが、吳研人には『二十年目睹之怪現狀』や『黑籍冤魂』(一九〇七)のように全知の語り手ではない一人称叙述の試みもあり、伝統白話小説の語りからの脱却を図るものとして評価されるが、『二十年目睹之怪現狀』では、途中、全知の語り方に回帰してしまう場面もみられ実験的な域を出るものでないと位置づけられている。また、「内面」の読みとりを読者に要求することを近代文学の指標として吳研人の小説を考察する山本明も、「近代の影」にとどまるものとして評価している。⁽¹⁴⁾ここで注意しなければならぬのは、小説形式の変化の要因を単純に、「内面」や「自我」といった作者の精神に還元してはならないことであるだろう。その意味では、陳平原が「叙事模式」の転換の要因を「個性を發揮し、自己を表現する」という五四の精神と結びつけることは、中里見敬が指摘するように陳自身が⁽¹⁵⁾ 拠って立つ物語論の言語観と齟齬をきたすばかりではなく、⁽¹⁶⁾

一元的な進化論的文学史に陥りかねない。これも物語論的考察を文学史記述へと転化する際に生じる問題であると考えられるが、文学史的な記述を試みるのであれば読者についての考察は不可欠であると言えよう。本稿は、本来、物語論が受け手である読者についての考察を禁欲的に斥ける傾向が強いことからみると、物語論の枠組みから大きく逸脱するものであるが、ここで先行する物語論的な研究成果を参照しつつ読者の問題について考察を試みたい。⁽¹⁷⁾

語りの問題を読者の問題と関連づけて論じるという点で、魯迅の『狂人日記』(一九一八)における近代性を作品の思想内容ではなく「語り」の構造に求めながら読者の問題を含めて考察する千野拓政の論考はたいへん興味深い。⁽¹⁸⁾『狂人日記』は中国近代文学の起点とされる作品であるが、千野は、『狂人日記』の「序」における文言(文語文)による「史伝」の文体の援用や「日記」の部分における内面の「語り」をあげ、そうした語りの構造が「近代文学」としてのリアリティを保証していると考察する。そして「内面」の読みとりについては、語り手がその存在を消すことが内面描写を可能にするのであって、口承文芸や講談の口調に基づいて書かれた伝統的な白話(口語体)小説

は、語り手が露出せざるをえないので、読者が登場人物の内面に入ることが難しく、内面描写が困難であると指摘している。

そして、千野は、日本の「言文一致」にあたる中国の「白話文学革命」が、語り手を消し内面描写を可能にする新たな口語体の文章を模索するものであったとし、前田の読者論を参照しながら、近代読者が新たな生活スタイルとして生まれた個室で孤独に作者と向かい合うような読者であるという観点から、近代にいたって、読者は「内面」を見つめる言葉を文学に求めるようになり、そうなったとき文学は、現実を描きつつ、それが個々の読者の内面に通底する新たなリアリティを必要としたと、読者の側から文体改革の要求を裏づけている。また、袁進が、「話本」模式の解体を作者が「自我」、「内心情感」の表現を求めたことに由来すると考えるのも、作者の主体という側から同じ現象を指摘していると言える。さらに陳平原が伝達媒体の拡大が、作者に擬似的な「語る―聴く」という関係から「書く―読む」という関係において読者を意識させ、それが近代的な文体意識を準備したと述べていることも読者の問題を含んだ考察であると言えよう。⁽¹⁹⁾

千野の考察は、中国における近代小説全般については妥当性を持つと考えられるが、ただ、『狂人日記』における語りの構造をみることによって「黙読」が行われていたと結論づけるのは性急であるように思える。なぜなら、清末小説に「語りの場」がみられることを考えると、清末小説から五四小説というきわめて短期間に「音読」から「黙読」へと移行したとみることは無理があるように思えるからである。⁽²²⁾ 読書形態における共同体的な音読から個人的な黙読へといった移行過程は、むしろ非常に長い時間を要した一個の歴史的な過程と捉えられるもので、とくに中国のように前近代において近代の萌芽が指摘されるような地域においては、二つの読書形態が存在する社会内部における文化的差異や、地域的、時間的な偏差にも注目する必要があるだろう。⁽²⁴⁾

また、「内面」の読みとりの可否を、「文言文」か「白話文」かといった言語の問題ではなく、「語り」の問題にみているところに千野の慧眼があると思えるが、ではなぜそれが「白話文」でなければならなかったのかといった問いも起こってくる。社会的には「国民」としての読者を形成するための啓蒙運動の一環として清末において広く展開

された白話文運動の存在は大きいと考えられるが、⁽²⁵⁾ 語としての「白話文」によって「内面」を読み取るような近代読者を生み出した「白話文学革命」については、稿をあらためて論じなければならない。⁽²⁶⁾ ここでは、清末とはそうした近代的な読者の形成が強く意識されはじめた時代であったということを確認しておきたい。

ところで、語り手や「語りの場」の顕在は、近代的な小説論の立場からすると、過去の文芸形態から引き継いだ余剰あるいは夾雑物に過ぎず、あくまで前近代性の指標であると言えるかもしれないが、しかし、そうした語り手の顕在化、あるいは「語りの場」の活性化ともいえるような「語り手の介入」が、むしろ清末になって激増していると趙毅衡が興味深い指摘をしている。⁽²⁷⁾ このような「語り」の安定性が失われた要因には、出版機構の構造変化、読者層の拡大などの社会的変化があげられるだろうが、⁽²⁸⁾ 本稿では、実際の社会において、作者が「声」を媒介とした語り手と聴き手の共同性を喚起するような「語りの場」を強く意識するようになったからではないかと考える。ここであらためて清末における「音読」環境が問われなければならない。

三

「近代読者」とは「黙読」を通して作者と一対一の関係を結ぶような「孤独」で自覚的な読者であるという観点から中国における近代読者論を試みたのが中野美代子である。²⁹⁾中野は、伝統小説に溯り、作者と読者との一対一の関係が成立する近代小説の先駆的な存在として『金瓶梅』をあげるなど、伝統小説も視野に入れた読者論を展開しており示唆的であるが、清末小説に関しても、呉趺人ら小説の作者が娯楽表現と同時に教育・啓蒙の役割を求められていたと、清末の作者に要請されていた「読者の形成」という側面にも触れている。しかし、西欧文学を規範とする中野の考察は、中国の読者の問題を「歪み」として捉える傾向が強く、また「歪み」の原因が伝統的な中国人の思考様式にあると文化論に還元してしまい、読者の問題の歴史的な文脈への考察を欠いてしまっている。清末における読者の問題を考察するには、国民としての読者の形成という要請下にあった当時の政治的・社会的状況を視野に入れながら、その要請が作者にどのように作用したのかを含めて論を進める必要があるとことを確認しておきたい。

近年、中国近現代文学研究の領域においても読者に関する考察が試みられているが、そうしたなかで「上海」という地域的な視点から「公共領域」の形成と同時に読者が形成されたと考える袁進の読者論は興味深い。³⁰⁾袁は小説の興隆の原因に、潜在的な読者であった旧知識人層（士大夫）の存在を想定し、本来は文言小説の読者であった「士大夫」が、「市民（士大夫を含まない）」が担っていた通俗小説の読者層になったことにより、「市民」が「士大夫」を包摂するかたちで「新市民」としての「公衆」が形成されたと考え、その契機として一九〇五年に「市民」を動員して繰り広げられた反アメリカ・ボイコット運動の進展などにみられる政治意識の高まりを指摘している。

袁進の考察は「市民」といった概念などが曖昧である点についてはさらなる考察を必要とするだろうが、清末の上海には都市化と商工業の発展にともなって新しいかたちの都市生活者が台頭してきたことは間違いないだろう。また当時、海外留学の起点であったことや西欧文化の摂取に好条件であったことに加え、知識人層の経済的な基盤となる学校、新聞社、書店、さらには、旅館、戲院、茶楼、妓院、娯楽場など多くの交流の場を有していた都市空間としての

上海は、多くの知識人を受容することのできる知的インフラを備えたような「場」を形成していたと言える。⁽³²⁾ 呉趼人もそうした知識人の一人であったが、例えば、呉は『新小説』に小説を発表する以前の『消閑報』、『采風報』、『奇新報』、『寓言報』といった「海派小報」と呼ばれる新聞の編輯に携わっていた当時に、「経済特科」に推薦されながら受験に応じることがなかった。このことから当時上海において新聞雑誌記者が経済的に自立できるだけの新聞雑誌の世界が成立していたことを推測するような指摘もある。⁽³³⁾ つまり、日本と同様に、中国においても近代読者の成立の社会的背景には、新聞ジャーナリズムの成立や出版機構の変化や、書院などを通じた伝統的な教育から近代的な新式学校制度への移行にともなう新しい知識人層の形成があり、当時の上海は近代読者の成立するための多くの有利な条件を具えていたと言えるが、さらに明清代を通じて大量の伝統知識人を輩出し続けてきた江南地方という知的後背地を持つていたこともそれに加えることができるかもしれない。このように、知的インフラの側面からみると、上海は中国において突出した都市であったと言えるだろうが、同時に袁進が読者形成の契機と考えるナショナルリズム運動の勃興

地でもあった。

吉澤誠一郎は、一九〇五年にアメリカによる移民制限を原因として起こった反アメリカのアメリカ製品ボイコット運動(以下、反アメリカ・ボイコット運動)にみられる各種媒体による「国民」意識喚起の過程の分析を通じて、地域社会と「中国」イメージの創成にとって、それがどのような歴史的意味をもったのかを考察し、この運動を通じて「中国人」という表象が広く共有されるにいたったと論じている。⁽³⁴⁾ 反アメリカ・ボイコット運動は当時、各地に波及し、商人、教師、学生といった広範な人々によって展開され、発生の原因や運動の広がりという面においてもローカルな局限性を超える画期的なものであったという。運動が展開し始めると、漢口にあった呉趼人は、アメリカ人の経営による『楚報』の編輯の職を辞して運動に参加するため上海に戻っている。⁽³⁵⁾

近年、中国においては西欧市民社会の枠組みを用いて近代における中国の民衆運動を考察するものもみられるが、吉澤と共通する点⁽³⁶⁾は人々に「呼びかけ」を行う媒体に注目していることである。⁽³⁶⁾ 民衆を運動へと動員していくための呼びかけは、反アメリカ・ボイコット運動において、まず

当時知識人たちを主な読者としていた新聞ジャーナリズムの力によって繰り広げられることとなった。しかし、そこであらわになったのは、文字言語によってでは呼びかけを受け取ることのできない「読めない読者」の存在であった。当時の中国における識字率の低さを考えれば、文字言語による伝達に限界があったことはやむをえない事態であったと思われる。清末における出版文化の発達や新聞雑誌といった新しいメディアの登場は、確かに従来の限定的な読者の広がりや急速に推し広めたであろうが、それでも、多くの民衆は依然として非識字者であり、「文字」ではなく、「声」を媒介とした潜在的な読者であるところの「未成熟な読者」に向って呼びかけることがより重要であったと言える。

清末においては、こうした「未成熟な読者」に対して、新聞や雑誌に限らず、演説、歌謡、小説、演劇をも駆使した啓蒙運動が繰り広げられていたが、知識人たちによって啓蒙を目的とした「閲報処」や「宣講処」も盛んに設置されるようになった。⁽³⁸⁾ 「閲報処」とは、各種の新聞雑誌および書籍を備えて一般に公開する施設であるが、さらに、文字がよくわからない者には、そこで新聞の内容を読み聞き

せるという伝達手段が用いられていた。⁽³⁹⁾ ここには、前田愛が指摘したような文字コミュニケーションに口話コミュニケーションが継ぎ足された状況がみとれるが、⁽⁴⁰⁾ 宣講処においても同じような啓蒙活動が行われていた。「宣講」とは一般に『聖諭広訓』を読み聴かせることを意味し、「宣」「講」とに分けて、前者は節つきで唱い、後者は語りの調子で講釈を進めていくものもあり、清末まで地方教化と統治のために欠くことのできない機能を果たしていたが、新教育のために便宜的に利用されるようになり、二〇世紀初頭にあつては啓蒙的な内容を伝える媒介としての性格を持っていた。⁽⁴¹⁾ 閲報処における読み聞かせや宣講はいずれも「声」を媒介とした「語る―聴く」という共同的な受容形式を持っていることが指摘できるが、中国の民間に広くみられた語り物文芸も同じように「語る―聴く」という受容形式を前提としていた。当時、宣講と通俗文芸が近い関係にあつたことは、啓蒙の道具として有効であつた宣講という形式が、内容によっては迷信など伝統的・封建的なものを伝えてしまうことを危惧するようない言説があつたことからもうかがえるが、これは共同体的な受容形式が強い浸透力を持っていたことを物語っており、逆から考えれば、通

俗文芸を近代的な社会要請に答えるような一つの媒体として眺めることも可能なのであり、通俗文芸が再発見される契機となったとも言えるだろう。そうした民間の通俗文芸への眼差しは呉趺人にもみられ、「小説叢話」(『新小説』第一九号、一九〇五年)で、広東地域の民衆の間に広く流行していた広東語による語り物文芸である木魚歌の唱本が持っている教化の役割について論じている。⁽⁴³⁾

ところで、宣講や通俗文芸に限らず、反アメリカ・ボイコット運動において呉趺人が展開した演説も同じように「語る―聴く」という共同体的な受容形式を持っていると言える。スピーチの訳語である「演説」が福沢諭吉の造語であることは広く知られていることであるが、中国においては当初「演説」と「宣講」の区別は明確ではなく、演説についての専門的な訓練が行われるようになって次第に区別されるようになったという。⁽⁴⁴⁾ 演説活動が行われた場所についてみると、主に中下層の人々にとっての社交の場であり、通俗文芸の芸人の活動場所であった茶館⁽⁴⁵⁾のほか、より大型の公共活動を収容できる「張園」など、私人の庭園が公に開放されることで近代的公共空間へと変容したような新式の庭園もあったが、張園においては、呉趺人も一

九〇一年三月二四日の拒俄運動の集会でおよそ一〇〇〇人の前で演説を行っている。「呉君次堯演説」(『中外日報』一九〇一年三月二六日)では、「本日お集まりの諸君は、おおかたはみな他省の人であって、上海の間人だけではないでしょうが、険阻な水路や陸路をやって来たのは何故でしょうか。およそ役人、商人、知識人あるいは庶民であるかを問わず、均しく事業を興して子孫に遺そうと思えばこそです。してみると、子孫のためにはかりごとをする心は、みなに共通するところであります。その子孫のためにはかりごとをするのは、子孫が餓えや貧しさに苦しむのを恐れるからにはかなりません。諸君も知っているようにロシアとの密約が成立したのなら、我々の子孫の苦しむこと、餓えや貧困より甚だしいではありませんか。⁽⁴⁷⁾」とその様子が伝えられている。

演説の内容からの聴衆が上海に限らず他地域からも集まり、また階層構成も多様であったことがわかるが、清末以降、上海に流入した多くの出自を異にする人々はナショナルリズム運動を通じて「公衆」として近代読者の基盤となったと考えられるだろう。⁽⁴⁸⁾ しかし、そこでまず問題化したのは、閲読能力に問題をかかえる「未成熟な読者」の存在で

あった。このような「未成熟な読者」を「国民」へと啓蒙していくために新旧さまざまなメディアや空間が動員される状況をみてきたが、その際、「文字」ではなく「声」を媒介とした伝達がむしろ重要であり、清末においては広い意味での音読環境が存在していたと言えよう。⁽⁴⁹⁾ 演説、宣講、通俗文芸は、いずれも「語り―聴く」という「語りの場」を前提とした「声」を媒介とする共同的な受容形式を基盤にしているが、聴き手の反応が語り手にとってより直接的に作用するという意味では、呉趼人も演説活動において強く聴き手の存在を意識することになったのであり、それは呉の読者像の変容をせまるような「未成熟な読者」との遭遇であったと言えないだろうか。

四

清末においては、「国民」としての読者という理念が明確に意識されたばかりではなく、それを実現する際に実体としてあらわれてくる「未成熟な読者」の存在も強く意識されるようになったが、「未成熟な読者」との遭遇は呉趼人の表現意識にも影響を及ぼすことになった。ここでは呉趼人が主な表現活動の場として選んだ新聞・雑誌媒体とそ

こでの呉趼人の言説を通して呉趼人の対読者意識の変遷について考察してみたい。呉趼人の表現活動を、媒体によって、「小報」、「新小説」、「月月小説」と大きく三つの時期に分けると、移行の契機として、「小報」と『新小説』の間には梁啓超による「小説界革命」の提唱を、そして『新小説』から『月月小説』の間には反アメリカ・ボイコット運動をみる事ができる。

呉趼人が「海派小報」と呼ばれる娯楽性の強い小新聞の編輯に携っていたことについては言及したが、こうした娯楽紙の読者層とは、ナショナルリズム運動を担うような新知識人というよりは、むしろ旧知識人と商人を含んだ識字能力を有する伝統的な読者により近い性格を持つ読者であったと推測できる。呉趼人は『呉趼人哭』（一九〇二）のなかで、「海派小報」の編輯に携わっていたことについて「五、六年の時を結局ここに無駄にってしまった。」と否定的に語っているが、呉趼人が「小報」の世界から離れた時期は、ちょうど梁啓超が『新小説』を発刊し、「小説界革命」を提唱した時期にあたり、呉趼人もそれに呼応するかたちで新しい表現の場を求めたと考えてよいだろう。

『新小説』は、一九〇二年に梁啓超が横浜において発刊

した文学雑誌であったが、梁は巻頭論文「論小説与群治之關係」において小説が人生にはたらきかける不可思議な力を分析しながら小説の社会に及ぼす効用を説くとともに、自ら小説「新中国未来記」も執筆、連載した。また、『新小説』誌上には「小説叢話」欄が設けられ、小説を語る「場」が創られた。⁽⁵¹⁾ 呉趺人の小説に関する文章は多くないが、「小説叢話」欄に自らの小説について論じた文章を掲載している。先述した通俗文芸を論じた文章がこれであるが、木魚歌の唱本を取りあげ、「婦女子はこれらの書物を読むうちに知らず知らず⁽⁵²⁾にその教化を受け、風俗もそれで良くなるわけである。」と伝統士大夫的な見地に立ちながらも通俗文芸が持つ教化の効用について論じているが、これも『新小説』という媒体において論じられていることを考えると婦女子を理想的な「国民」としての読者へと変革していく可能性を含むものであったと言えないだろうか。と、その一方でそれが語られた「小説叢話」が創り出したような「場」とはそれまでにはない新しい意味を持つものでありながら、やはり文人的な共同性を基盤とするような「場」であったのではないかと考える。

本稿を構想する際非常に啓発された清水賢一郎の考察は、

「国民」形成のためのメディア的実践として『新小説』を捉えているが、⁽⁵³⁾『新小説』にみられる「眉批」に対して清水がより近代的な意味を読み取っている点については、「眉批」に限らず批語を加える心的態度そのものはやはり伝統的な批評意識により近かったのではないかと思える。というのも、清水は「眉批」を通してあらわれる「解釈共同体」を基盤とした「読者共同体」を「国民」と結びつけ、「眉批」を「読者共同体」としての国民共同体を組織化しようとする際の、基軸メディアの一つだったと位置づけているが、⁽⁵⁴⁾むしろ「眉批」、「批語」を通して形成されるような共同性は、「解釈共同体」というきわめて自覚的な読者によって構成されるがゆえにこそ、「国民」的な広がりをもたない伝統的な文人意識に基盤を持つ共同体に終始してしまうのではないかと考えるからである。そのことは、清水が触れているように、明末清初の文人金聖嘆が評点を施したいわゆる才子書とその批評について、「新小説」作家たちが意識的であったことや、⁽⁵⁵⁾呉趺人の「小説叢話」の文章や「呉趺人哭」で金聖嘆への言及があることからもうかがえる。『新小説』の時期における呉趺人の対読者意識とは、伝統的な批評意識を基盤としながら新しい読者像の模

索の過程であったが、反アメリカ・ホイコット運動の経験などを通して「国民」としての読者といった方向へ向うことができなかったと考えることができるのではないだろうか。

一九〇六年一〇月、新たに創刊された『月月小説』の総撰述に迎えられた呉趼人は、『月月小説』誌上に多くの作品を発表すると同時に編輯にも携るが、それ以前、呉は反アメリカ・ホイコット運動の失敗が大きな原因となつて、無聊の日々を過ごしていたと推測されている。⁵⁶ 反アメリカ・ホイコット運動への参与は、呉趼人にとって実体として目前に出現した「未成熟な読者」との遭遇であり、そのような自覚的でない読者の像が、それまで理念としてあった読者の像に付与される契機となつたと考えるが、『月月小説』の創刊号に寄せた『月月小説』序（『月月小説』創刊号、一九〇六年一月一日）の中に呉趼人の対読者意識をみてみたい。呉趼人は「序」において、「私は飲冰子（梁啓超。論者注）が『小説与群治之關係』の説を出し、小説の改良を提唱すると、数年も経たぬうちに我國の新著新訳は夥しい数に及び、なお毎日のように発表されて尽きるときがないことに感心した。」⁵⁷と、梁啓超に影響を受け

たことについて述べている。張仕英は梁啓超の「小説界革命」が、呉趼人の創作に多大な影響を与えたと考え、⁵⁸ また中野美代子は、呉が梁啓超の効用論の影響を強く受けつつ、小説の持つ「特別な能力」として、梁の説く「群治」以外に「記憶力の補助」と「知識を導入しやすいこと」についても述べ、後者の理由から小説を読む者のため善導を心がけるべきである旨を記し、最後に小説の德育的效果を特記している⁵⁹とまとめている。これまで「序」に言及があるときは、およそ呉趼人に梁啓超の影響をみるような考察がほとんどであったが、ここでは、前半部分の受け手を意識したと考えられる箇所注目したい。まず、呉趼人は、小説が流行していることを中国人が「随声附和」であることに関係づけているが、「序」の冒頭においてその「随声附和」であることが中国社会の人々に豊富にみられて、他の民族にはめずらしいものであると言及し、その様子を「普通に言えば、演壇にあがって、演ずるものの主旨がどのようなものであるかは問わず、そのうえせきはらい、唾をとばしながらの声、泣き声、ひそひそ声のなかであるのも問わず、私はかつて演ずる者がどう言っていようと、一人が手をたたくとき、多くの人がこれにあわせ、はじけるようなすこ

い音であったのを聞いたことがある。(略) こういったことはいずれも訳もわからずやっているのだろうか?是非曲直を分別せず、美醜善悪を分別せず、群れをなして呼応することを、私はかつて何度も考えたが理解できなかった。是非曲直を分別せず、美醜善悪を分別せず、一斉に立ち上がって呼びかけに応じてしまうので、最後にはそれでよしとなってしまう。⁽⁶⁰⁾と述べている。

この一人が声をあげるとみなそれに和してしまうような状況のなかに自覚的な読者の姿を見出すことはできない。そこにあらわれているのは、むしろ「他者」としての読者に近い像であり、これも反アメリカ・ボイコット運動への参与と挫折を通じて呉趺人に培われた受け手の像であったと言えよう。このように自覚的でない「未成熟な読者」の像が描定されるからこそ、読者に影響を及ぼしやすいい小説においては、小説という「形式」に載せる「内容」がより重要になるのだと考えられる。「序」の後半において「徳育」さらには「道徳」の必要性が強く意識されるのもそうした理由によるものであるだろうが、呉趺人が「道徳」の必要を語るとき、今日において封建的と評価されるその思想の中にさらに「書く／読む」ことへの規範性を求めるよ

うな姿勢がみられなくはないだろうか。

清末のナショナリズム運動において顕在化した「未成熟な読者」とは、「読書する公衆」ではないが、反アメリカ・ボイコット運動のような近代中国における民族運動の萌芽を担った主体であり、ときに暴動やストライキ・デモ行進などによって歴史が大きく動いてきたのが中国の近代史であって、「国民」的な読者の問題を語る際には、このような「未成熟な読者」の存在を見逃すことはできない。⁽⁶¹⁾しかし、民族運動の主体となっていくような「未成熟な読者」の出現は、呉趺人にとっては自らの表現意識においては「共感」することのできない「他者」として意識されていたのであろう。

五

『月月小説』(一九〇七年一月)に掲載された『黒籍冤魂』⁽⁶²⁾は、当時中国国内で広く展開されていたアヘン禁止運動を題材にした作品であるが、形式としては一人称小説が採用されており、『二十年目睹之怪現狀』や、魯迅の『狂人日記』(一九一八)と同じく「粹物語」の構造もち、二次物語である横死するアヘン吸飲者の「手記」に、その額

縁としての一次物語がその「手記」を渡された「私(我)」によって語られている。『二十年目睹之怪現狀』が途中、語り手が伝統白話小説に顕著である全知の語り手に戻ってしまうような乱れもみられるのに対し、『黒籍冤魂』は短編小説という性格もあってか、語りが破綻することなく一貫している。しかし、その一方で、冒頭で一次物語の語り手である「私」が、テキスト内の聴き手である「読者諸君(諸公)」を強く意識して語るような「語りの場」が明確に表われた語りが採用されている。そして、語り手によって、世間の小説が勸善懲惡を説いているのに対して、自分がこれから書く短篇小説は、事実在即したものであるから「懲」があるのみで「勸」はないと述べられ、続いてインドにおけるアヘン栽培の起源についての荒唐無稽な説話が挿入される。こうした語り手が饒舌を披露することは、伝統白話小説の語りにはかならないが、その後、ようやく同時代のアヘン禁止運動が展開している中国に舞台が移り、それまで饒舌であった語りが一転して淡々と出来事の経過のみを語るような口調になり、「手記」を入手した経緯が語られ、いわゆる近代小説で一般的な語りを展開される。そして、張園で開かれた演説会にイギリスから派遣された

アレクサンダーの演説を聴きに行った「私」が、その帰りでアヘン吸飲者の横死に出くわして「手記」を入手することになり、それをもとに小説を書くのであるが、アヘン吸飲者の「手記」の部分では、アヘン吸飲者本人である「私」によって自らの物語が語られる。

張園における集会は、一九〇六年十二月一四日の *Non-China Herald* (北華捷報) によると実際に開催されたもので、⁽⁶³⁾ 『黒籍冤魂』が一九〇七年一月の発表であることから、物語に臨場感を持たせるねらいがあったと思われる。ところで一次物語の語り手である「私」とは、物語の語り手であると同時に、当時の上海にあって代表的な公共空間であった張園において「公衆」とともに集会に参加した演説の聴衆の一人であるという聴き手としても設定されている。「私」は、最後の一節で、「読者諸君、以上はすべて彼の手記から書き写したもので、彼の書き間違えを改めたばかりは一字も変更を加えていません。(略) 私はちょうどアレクサンダーと志士たちの演説を聴いてきたところで、それらはみな人にアヘンを戒めることを勧めるものでしたが、ところがアヘン吸飲者はこうにまでなってもそれでもやめないとは、世間には本当に不思議なことがあるもので、

よってこの手記を特に発表し、人にアヘンを戒めることを勧めるような苦い薬として、さらに行き倒れた屍のその身をもって示した教訓をむだにしないことにしました。」⁽⁶⁴⁾と、演説が届かないアヘン吸飲者の実情を伝えるために、「手記」を小説として発表したと述べているが、ここでは、語り手の「私」は「公衆」とアヘン吸引者とを媒介する役割を担わされている。

アヘン吸引者の末路を「見聞」としてのみ語るような「私」を「傍観的な一人称」であることによって、作者の「自我」の不在を指摘するむきもあるが、小説の「語り」から呉趼人自身に「自我」が不在であったと言うことはできないだろう。確かに、語り手の「私」は媒介的な位置付けしか与えられていないが、むしろ重要なのは、語られる内容が「いま、ここ」の、作者自らが属す社会の問題であること、そして語り手である「私」が、そうした社会に身を置く者として語っていることだろう。清末小説にみられる「語りの場」とは、伝統白話小説における「語りの場」があくまで書記レベルにおいて制度化された形式であったのに対して、より現実の社会に接近した実体的な意味を持つものであったのではないかと考えられる。このような観

点から、『黒籍冤魂』は近代的な側面を持っていたとも言えるだろうが、しかし、その反面、末尾の「しかし、アヘンを吸飲する友人がみたら、私を酷薄だと罵ることにちがいないが、私もそんなことまで気にかけていられない、ただ罵しらせておくしかない。」⁽⁶⁵⁾からは、語り手のアイロニックな姿勢しか感じられない。そうしたアイロニック語りは、語り手が自らを投影したような内的対話者であるテクスト内の「読者諸君」とのコミュニケーションを想定した「語りの場」の機能によるもので、『黒籍冤魂』に限らず『月月小説』に発表された「短篇小説」には、外部の読者に共感を求めない語り手のアイロニックな声が響いているが、これも表現のうえで「公衆」と結びつくことがなかった呉趼人の対読者意識を反映しているものと言えよう。呉趼人の政治的な参与に「国粹」思想を見出し最終的には「憂愁」から「厭世」へと暗転していったとする考察もあるが、⁽⁶⁶⁾呉趼人の事蹟をたどると一九〇八年に学校の設立に関わるなど社会への参与の姿勢は失っていないようにみえる。それでも呉趼人に「厭世」的な姿が見出されるとすれば、それは表現の上で読者との「共感」を失った、語り手としての姿なのかもしれない。

六

梁啓超によって打ち出された「国民」としての読者という理念的な読者像は、上海のような都市においては、近代読者成立のための基盤となりうるような「公衆」というかたちで実体として形成されつつあったと言えるが、その一方で、反アメリカ・ボイコット運動を通じて顕在化したのは、「未成熟な読者」という潜在的な読者の存在であった。清末とはじめて「未成熟な読者」を「国民」的な読者へと変革していくことが求められた時代であり、そこには小説を含めた新旧さまざまな媒体が動員される様相がみとれたが、歴史・社会的実体としての「未成熟な読者」の出現は、異蹠人の表現意識の中で、他者としての「未成熟な読者」の像から自ら乖離することになったと言える。

本稿におけるこうした考察は、読者の問題をむしろ作者の側から問うような性格が強く、より読者の側に引きつけて考察するためには社会的な視点の積極的な導入が不可欠であるが、これも作者の自己意識が内側のみへは進まずに、受け手の問題を強く含んだかたちで自己意識の形成へ向うことになった近代中国における作者のあり方を描き出

そうとするモチーフがあったからである。

ところで、「未成熟な読者」の問題は清末に限らず、その後も植民地化への抵抗という緊張した歴史の中で「動員」と強く結びつきながらたびたび姿を現すことになったが、それは一九三〇年代においては文芸大衆化論争の「大衆」として、また抗日戦争下の一九三〇年代末から一九四〇年代はじめにかけては「民族形式」論争の中で問題となり、「労働者、兵士、農民」という「未成熟な読者」を絶対化する毛沢東の『文芸講話』（一九四三）によって「解決」をみることになったと言える。人民共和国成立以後、「普通話」の普及の推進によって識字能力の向上が進み、社会的には「未成熟な読者」の問題は表面化しなくなったが、一方で抗日戦下から冷戦下へと動員体制が維持されたことによって、総括されることがなかった『文芸講話』的な文学観は、その後、文化大革命期まで、作者の確立や表現の自律性を抑圧する装置として機能することになった。その意味でポスト文革期とは、作者復権の時代であったと言えるが、市場経済化にともなう大衆社会状況が出現した現在、一九八〇年代にはモダニズムの導入者として活躍した李陀のような批評家が、「純文学」をめぐる議論におい

て作者と読者の乖離を問題とし、作者の社会性の回復を提唱している状況を見ると、読者の問題はかたちを変えて今なお存在していると言えるだろう。

- (1) 代表的なものとして袁進『中国小説的近代変革』(北京・中国社会科学出版社、一九九二年)。また近年における清末小説に関する専著として、黄錦珠『晚清時期小説觀念の転変』(台北・文史哲出版社、一九九五年)、欧陽健『晚清小説史』(杭州・浙江古籍出版社、一九九七年)、(王德威(David Der-wei Wang) Fin-de-Siecle Splendor: Repressed Modernities of Late Qing Fiction, 1849-1911, Stanford U.P. 1997 (被压抑的现代性—晚清小説新論) 宋偉傑訳、台北・麦田出版、二〇〇三年、David Der-wei Wang Fin-de-Siecle Splendor: Repressed Modernities of Late Qing Fiction, 1849-1911, Stanford U.P. 1997) がある。
- (2) 松永正義『近代文字形成の構図—政治小説の位置をめぐって』『東洋文化』第六一号、一九八一年三月、一七三頁。
- (3) 中野美代子「風俗小説の系譜(Ⅲ)——吳趸人論ノオト」『外国語・外国文学研究』8、一九六〇年二月。
- (4) 中野美代子「清末小説研究」一—五『外国語・外国文学研究』一九五七—一九六二年、中野美代子『中国人の思考様式—小説の世界から』(講談社現代新書、一九七四年)。
- (5) そのような試みとして、(注1) 王德威『被压抑的现代性—晚清小説新論』がある。
- (6) 樽本照雄による実証的な研究を読者論の準備作業として位置づけることができるだろう。樽本照雄『清末小説閑談』(法律文化社、一九八三年)、『清末小説論集』(法律文化社、一九九二年)、『清末小説探索』(法律文化社、一九九八年)、『初期商務印書館研究』(清末小説研究会、二〇〇〇年)など。
- (7) 日本において吳趸人を取りあげた論者がまとまっている著作として中島利郎『晚清小説研叢』(汲古書院、一九九七年)がある。
- (8) 代表的な著作に、陳平原『中国小説叙事模式的転変』(上海・上海人民出版社、一九八八年)、趙毅衡『苦惱的叙述者—中国小説的叙述形式与中国文化』(北京・北京十月文艺出版社、一九九四年)、中里見敬『中国小説の物語論的研究』(汲古書院、一九九六年)などがある。
- (9) (注8) 陳平原『中国小説叙事模式的転変』。また、陳平原には『二十世紀中国小説史・第一卷(一八九七—一九二六年)』(北京・北京大学出版社、一九八九年)がある。

- (10) (注8) 中里見敬『中国小説の物語論的研究』第三章「魯迅「傷逝」に至る回想形式の軌跡―独白と自由間接話法を中心に」、平井博「叙法から見た魯迅の一人称小説」『人文学報』第二七三号、一九九六年など。
- (11) 千野拓政「声・語りの場・リズム」『接続』一号、二〇〇一年。
- (12) 小南一郎「語から説へ―中国における“小説”の起源をめぐって」『中国文学報』第五〇冊、一九九五年。
- (13) 盛り場において実際に「声」を媒介にしていた語り物文芸の「語りの場」と、書記化されたテキスト内における「語りの場」との間には継承と同時に断絶があることも看過することはできない。趙毅衡は、伝承された物語内容が出版のたびに編集者によってテキストとして繰り返し加工された「改正期」と呼ばれる時期を設定し、この段階で起った編集者という書写主体の平均化、小説の形式的特徴の均質化によるその結果として、語りの形式が定型化されたのであって、決して語り物文芸の直接の反映ではないことを指摘している。(注8) 趙毅衡『苦惱的叙述者―中国小説的叙述形式与中国文化』。
- (14) 呉研人の小説についての物語論的考察をしたものとして、山本明「呉研人に見る近代の影」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊第十六集 文学・芸術篇』一九九〇年

- 一月 Patrick Hanan Wu Jianren and the Narrator 『世爰与維新―晚明与晚清的文学芸術』(台北・中央研究院文哲研究所、二〇〇一年)がある。
- (15) (注14) 山本明「呉研人に見る近代の影」。
- (16) (注8) 中里見敬『中国小説の物語論的研究』二〇一頁。
- (17) (注8) 中里見敬『中国小説の物語論的研究』では「聴き手」について若干の考察がある。
- (18) 千野拓政「文学に近代を感じる―魯迅『狂人日記』と「語り」のリアリティー」『接続』一号、二〇〇一年。魯迅小説に対する物語論的考察を行ったものとして、(注8) 中里見敬『中国小説の物語論的研究』第三章「魯迅「傷逝」に至る回想形式の軌跡―独白と自由間接話法を中心に」、(注8) 平井博「叙法から見た魯迅の一人称小説」『人文学報』第二七三号、一九九六年などがある。
- (19) 前田愛『近代読者の成立』(有精堂、一九七三年)。なお、岩波現代文庫版(二〇〇一年)を参照した。
- (20) (注1) 袁進『中国小説の近代変革』一一二頁。
- (21) (注8) 陳平原『中国小説叙事模式的転変』。
- (22) 前田愛による「首読から黙読へ」という読書形態の移行過程の定式は、近世から近代へという歴史的過程として流布している観があるが、山田俊治は、前田が析出した音

読環境とは、明治初年という文字が均質的、一元的に支配する社会の中で生起した出来事であって、リテラシーが問題化したことで音読/黙読が前景化した時代を捉えたものであると指摘している。さらに、「音読から黙読へ」という図式が、近代読者⇨黙読となることで、近代以前の黙読の可能性や近代における音読の歴史性を捨象してしまう危険があると注意を喚起している(山田俊治「音読と黙読ということ」『岩波講座日本文学史』月報二一、一九九六年一〇月)。

(23) ロジェ・シャルチエ「書物から読書へ」『書物から読書へ』(水林章ほか訳、みすず書房、一九九二年)。

(24) 日本の音読から黙読への移行過程にみられる階層、地域、時間的な偏差を描き出すものとして永嶺重敏『雑誌と読者の近代』(日本エディタースクール出版部、一九九七年)がある。

(25) 清末白話文運動については譚彼岸『晚清の白話文運動』(漢口・湖北人民出版社、一九五六年)、陳万雄『五四新文化運動的源流』(北京・三聯書店、一九九七年)を参照。

(26) 中国における「俗語革命」と「内面」の問題については村田雄二郎「文白の彼方に―近代中国における国語問題」『思想』八五三号、一九九五年が考察を加えている。

(27) (注8) 趙毅衡『苦惱的叙述者』五六―六一頁。

(28) 清水賢一郎「テクストの眉―清末小説の眉批とその批評性をめぐって」『饗養』第五号、中国語学会、一九九七年九月、一三―一四頁。

(29) 中野美代子「中国近代読者論―その成立・変遷・崩壊」『悪魔のいない文学―中国の小説と絵画』(朝日新聞社、一九七七年)。中野は、チボーデ『小説の美学』(生島遼一訳、白水社、一九五五年)やそれを援用した伊藤整「内なる声と仮装」『小説の方法』(河出書房、一九四八年)、さらに外山滋比古『近代読者論』(みすず書房、一九六九年)、(注19) 前田愛『近代読者の成立』を参照している。

(30) 李慶国「近代報刊小説と読者の閱讀方式」『三重大学人文論叢』第一号、一九九四年、李慶国「論清清末民初近代小説読者の形成及其特征」『三重大学人文論叢』第一三号、一九九六年、李慶国「近代における新聞・雑誌小説と読者の読み方をめぐって」『追手門学院大学東洋文化学会編』阿頼耶順宏・伊原澤周両先生退休記念論集 アジアの歴史と文化(汲古書院、一九九七年)、張仕英「清末小説家の創作動機と読者意識について」『一松学舎大学人文論叢』第五八輯、一九九七年三月など。中国においては王麗麗「中国近現代文学と読者」『北京大学学报(哲学社会科学版)』二〇〇〇年第一期など。

- (31) 袁進「試論晚清小説読者的変化」『明清小説研究』二〇〇一年第一期。中国史の分野で「公共圏」を論じることの是非をめぐってはすでに多くの論考があるが、本稿で「公共領域」という場合は、歴史的実体概念としての「世論を形成する社会関係」のような公共性の社会空間と考えたい(佐藤卓己『大衆宣伝の神話』弘文堂、一九九二年を参照)。
- (32) 熊月之主編『上海通史』第六卷(上海人民出版社、一九九九年)四七二〜四七四頁。また近年、都市空間としての上海を「公共領域」の形成という側面から考察する関心も高まっているが、そうした研究として、熊月之主編『上海通史』のほかに、日本上海史研究会『上海——重層するネットワーク』(汲古書院、二〇〇〇年)、小浜正子『近代上海の公共性と国家』(研文出版、二〇〇一年)などがある。
- (33) 樽本照雄「経済特科考」(注6)『清末小説探素』一六八〜一八四頁、樽本照雄「李伯元と吳研人の経済特科」『清末小説探素』一八五〜二〇〇頁、樽本照雄「李伯元、吳研人と経済特科」『清末小説探素』二〇一〜二〇五頁。
- (34) 吉澤誠一郎「天津における「抵制美約」運動(一九〇五年)と「中国」表象」『中国—社会と文化』第九号、一九九四年(のちに『天津の近代—清末都市における政治文化と社会統合』名古屋大学出版会、二〇〇二年に収録)。吉澤誠一郎「ナショナリズムの誕生」『地域の世界史II 支配の地域史』山川出版社、二〇〇〇年(のちに『愛国主義の創成—ナショナリズムから近代中国をみる』岩波書店、二〇〇三年に収録)。
- (35) 吳研人と反アメリカ運動とのかわりについては林健司「吳研人と反華工禁約運動」『呻呻』二〇、一九八五年三月がある。
- (36) 金希教「抵制美貨運動時期中国民衆的『近代性』」『歴史研究』一九九七年第四期。朱英「深入探討抵制度美貨運動的新思路」『歴史研究』一九九八年第一期など。
- (37) Rawskiは、男性三五〜四五%、女性二〜一〇%と試算しているが(Education and popular literacy in China, The University of Michigan Press, 1979)葛兆光は、地域的な不均衡などを鑑みて、一〇〜二〇%に過ぎなかったと考えている(『時憲通書』の意味)『讀書』第二一四期)。資料によっては、一%ほどの識字率しかなかったというものもあり、また都市部と農村部の不均衡も考慮する必要があるだろうが、少なくとも圧倒的多数は非識字者の状態にあったと言える。
- (38) 李孝悌『清末の下層社会啓蒙運動一九〇一〜一九一一年』(台北・中央研究院近代史研究所、一九九二年)。

- (39) (注38) 李孝悌『清末の下層社会啓蒙運動一九〇一—一九一一』六〇—六三頁。
- (40) (注19) 前田愛『近代読者の成立』一四六頁。
- (41) 宣講については、大村興道『「宣講」の名義について』『東京学芸大学紀要』第二集第二部門、一九七〇年。大村興道『明末清初の宣講図式について』『東京学芸大学紀要』第三〇集第二部門、一九七九年を参照。
- (42) (注34) 吉澤誠一郎『天津における「抵制美約」運動(一九〇五年)と「中国」表象』二二三頁。吉澤は、新しい宣講を、民衆文化を否定し「民智」を向上させることで啓蒙された「国民」をつくらうとする活動であったと論じている。
- (43) 『呉研人全集』第八巻、二二六—二二七頁。
- (44) (注38) 李孝悌『清末の下層社会啓蒙運動一九〇一—一九一一』八四—九七頁。
- (45) 鈴木智夫『清末江浙の茶館について』『歴史における民衆と文化・酒井忠夫先生古稀祝賀記念論集』(国書刊行会、一九八二年)。
- (46) 熊月之『清末上海における「私園公用」と公共空間の拡散』(注32) 日本上海史研究会『上海——重層するネットワーク』。
- (47) 『呉研人全集』第八巻、二二七頁。
- (48) 加藤周一は日本においては明治維新後の二〇年間に地方から就業機会や就学を目的として東京へ流入した人々がそれまでの身分制社会にはなかった公衆を形成し、この公衆が演説会の聴衆や新聞の読者となったと論じている(加藤周一「明治初期の文体」『文体』(日本近代思想大系一六、岩波書店、一九八九年)四五〇頁)。
- (49) 「声」の問題は「国語」の形成という場面でより重要になっていくが、そのことについては平田昌司「日の文学革命・耳の文学革命——一九二〇年代中国における聴覚メディアと「国語」の実験」『中国文学報』第五八冊、一九九九年四月がある。
- (50) 『呉研人全集』第八巻、二二二頁。
- (51) 斎藤希史『近代文学』への認識と実践——梁啓超とその周辺』狭間直樹編『西洋近代文明と中華世界』(京都大学出版社、二〇〇一年)一九〇頁。斎藤は「小説叢話」欄の出現を小説サロンの誕生とし、そこで展開された小説論を考察している。
- (52) 『呉研人全集』第八巻、二二六—二二七頁。
- (53) (注28) 清水賢一郎「テキストの眉——清末小説の眉批とその批評性をめぐって」。
- (54) (注28) 清水賢一郎「テキストの眉——清末小説の眉批とその批評性をめぐって」二二二—二二七頁。

(55) (注28) 清水賢一郎「テクストの眉―清末小説の眉批とその批評性をめぐって」九七頁。

(56) 中島利郎「呉研人と『月月小説』」(注7)『晚清小説研叢』(汲古書院、一九九七年)二二四～二三五頁。

(57) 『呉研人全集』第八卷、一九八頁。

(58) (注30) 張仕英「清末小説家の創作動機と読者意識について」二二二～二二三頁。

(59) (注3) 中野美代子「風俗小説の系譜(Ⅲ)―呉研人論ノート」三～四頁。

(60) 『呉研人全集』第八卷、一九八頁。

(61) (注31) 佐藤卓己『大衆宣伝の神話』参照。佐藤は、ドイツにおける社会運動に見られる「大衆的公共性」の構造をメディア史から考察し、ハーバーマス(「公共性の構造転換」(一九六二)細谷貞雄ほか訳、未来社、一九九四年)の考える、宮廷祝祭、君主の行列、教会のミサなどの「代表具現の公共性」から、新聞などに代表される市民的な「文筆的公共性」への発展には、暴動やストライキ・デモ行進によって現実の世論を動かした教養Ⅱ資産なき民への視点が欠けていると批判している。

(62) アヘン禁止運動については、加藤祐三『イギリスとアジア―近代史の原画』(岩波新書、一九八〇年)、王宏斌「清末新政时期的禁煙運動」『歴史研究』一九九〇年第四期

を参照。

(63) (注14) Patrick Hanan Wu Jianren and the Narrator によって知った。

(64) 『呉研人全集』第七卷、二八頁。

(65) 『呉研人全集』第七卷、二八頁。

(66) 麦生登美江「呉研人―憂愁から厭世へ」『野草』第一号、一九七二年。

(67) 李陀・李静「漫説『純文学』―李陀訪談録」『上海文學』二〇〇一年第三期。

二〇〇四年五月二日受稿
二〇〇五年六月六日レフェリーの審査
をへて掲載決定

(一橋大学大学院博士課程)